

私たちのそばに二艘の駆逐艦が横づけになった。係員らしい人が叫んだ「此の列から後ろの人は、この船に乗船してください」。どどと列が動き出した。押されて弟が倒れた。私が抱き起し、母に目で合図した。「大丈夫だよ」と。4歳の妹は必死で母の手を握り、下の弟も母のリュックサックの端を握りながら板を渡った。私と上の弟も続いた。

キャーという悲鳴が上がった。数人が押されて岸壁と船の間に落ちて行った。長い悲鳴だった。でも、だれもが黙々と板を渡った。・・・多分、家族や知人がいたかもしれない。だれも関わろうとしなかった。この船に乗らなければ、いつ帰ることができるかわからない。助けてやりたいと、だれもが思った。しかし、巨大な塊のような群衆の流れに、逆らうことは到底できなかった。

甲板でゴロリと横になり皆が眠った。引き揚げ命令が出て帰国の準備をし、漸く港大泊に着いた。そこで空襲という未経験の惨劇に出会った。何日ぶりだろう、心から安心して眠った。8月とはいえ北の海の夜は冷える。私は体の冷えて眠りから覚めた。母の横顔が見えた。何かに必死に耐えている顔だった。おそらく、子供だけを連れて帰国しても、その後の生活はどうなるのだろう。予想もつかない将来の不安に怯え、疲れていても眠れなかったに違いない。

【6】小笠原丸は撃沈された

8月23日の午後、稚内に渡った。そこで下船し、汽車に乗るのだ。稚内駅のプラットホームにも人は溢れていた。無事上陸出来た喜びや、出迎えの人との会話は、大きな騒音となっていた。そのざわめきの中で、小笠原丸が沈んだらいいとか、潜水艦に攻撃されたらいいなどと、声をひそめて話している人たちもいた。

私たち家族は言いようのないショックを受けた。私の年齢が誤記されなければ、かの船にのったことは間違いないことだったからである。

帰国して数年経ったとき、新聞に「三船殉難事件」が報道された。以下、抜粋。

(1) 小笠原丸沈没

1945年8月20日、引揚船の1隻である通信省の小笠原丸が、引揚者1,500名を乗せて、大泊から稚内に渡った。乗

客の半数は稚内で下船したが、残りの半数は最終港の小樽を目指した。その途中の8月22日午前4時20分ころ、留萌沖の海上で国籍不明の潜水艦の雷撃により撃沈され、乗員乗客638名が死亡し、生存者は61名だった。

(2) 第二新興丸大破

同日、午前5時13分ころ、大泊からの引揚者3400名を乗せ小樽へ向かっていた特設砲艦第二新興丸が、留萌沖の海上で、国籍不明の潜水艦の魚雷が命中し、約400名が犠牲となった。

(3) 泰東丸沈没

同日午前9時52分、大泊を出航し小樽へ向かった泰東丸は国籍不明の潜水艦の砲撃を受け沈没した。乗客780名中667名が死亡した。

(4) 国籍不明の潜水艦

2007年、樺太の新聞「ソビエツキー・サハリン」の取材で、サハリン州公文館から、公開された資料によると、ソ連はスターリンの命により、樺太に続き北海道北半分を占領するため、狙撃部隊2個師団による留萌への上陸を企てていた。

この作戦の前哨として潜水艦2隻は偵察と護衛の任にあたせた。この作戦行動ににおいて3隻の船を攻撃し、2隻を撃沈し、1隻を大破させたと記録されている。

この作戦は、米国の強い反対で22日の夕刻、急遽中止されたが、戦闘停止命令が潜水艦に届いたのは、すべてが終わった深夜だったという。

【7】戦争——すべての人が悪魔となる

8月になると、此の事件のことを語りたくなる。被害を受けた日本人も、飛行兵や潜水艦の兵隊も、個人としては良い人かもしれない。しかし、戦争となれば、だれもが悪魔になる可能性をもっている。今も、地球上では戦火に怯えている人が大勢いる。平和を祈るばかりである。

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA

〒145-0064 東京都大田区上池台 3-39-9
TEL: 03-5754-2240 FAX: 03-5754-2241
HP: www.jolnet.com



張江 幸男 (はりえ ゆきお)

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問

前全日本空輸(株)海外子女教育相談室長、元三菱商事(株)相談室長、元ニューヨーク日本人学校校長、元台北日本人学校教頭



張江先生ご自身の貴重な戦争の体験です。

今でも世界中で戦争が続いています。しかし、子どもたちは、その戦火を、リアリティーのない映像でしか知りません。「戦争となれば、だれでもが悪魔になる可能性」など、想像もつかないでしょう。

平和な日本の学校・社会では、子ども達が戦争について議論することはありません。佐々先生・張江先生の祈りである「子ども達が戦争に巻き込まれない」ように、子ども達に何を教え、伝えればいいのか？